

## 鹿児島の地質40

## 種子島の地形・地質

地質担当 多久島 徹

## 種子島の地形

種子島は佐多岬から南東約40kmの海上に浮かぶ周囲約170km、面積約450km<sup>2</sup>の島です。最高海拔は約282mで、隣の屋久島（宮之浦岳1,936m）とは対照的にかなり低く、全体的に平坦な段丘地形からなる島です。島の中央部東シナ海側（西側）には全長約12kmにも及ぶ島内最大の長浜海岸があります。ここはウミガメの産卵地としても有名です。また、太平洋側（東側）には鉄浜海岸があります。この砂には「砂鉄」が多く含まれ、古くから刀や鉄砲などの原料として使われていました。



段丘



鉄浜海岸



門倉岬の断崖



千座の岩屋（海食洞）

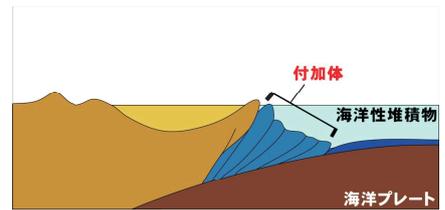
このほか、岩石でできた海岸にもおもしろい地形が数多くみられます。急峻な崖や波によって削られた海食洞などがあります。

## 種子島の地質

種子島の地質は、古第三紀中期の熊毛層群、新第三紀中新世の莖永層群、第四紀の増田層、長谷層、竹之川層およびローム層が分布しています。

種子島の基盤となる熊毛層群は、島のほぼ全域に分布しています。この地層は、海洋プレートが沈み込むときにプレート上の堆積物が陸側へ押しつけられてできた堆積物で「付加体」といいます。この地層には海産動物の

化石（生痕化石）や海底地滑りの堆積物などから、深海底で堆積したと考えられています。



付加体模式図

## 種子島にゾウがいた

昭和62年8月7日、種子島の西之表市住吉形之山（増田層形之山部層）で、鹿屋高校地学部の生徒たちによって、大型の獣骨化石が発見されました。現地で採集された7個の化石は鹿児島大学へもたらされ、鑑定された結果、ゾウの前肢の一部、肋骨、肩甲骨の一部であることがわかりました。

このゾウの生きていた時代は、広く氷河におおわれてた寒冷な気候が続いていました。氷河時代になると島々が陸続きとなり、草食動物たちは寒い北の地から、草や木の生い茂る温かい南の方へ移動します。このゾウもそのとき大陸から種子島まで渡ってきたと考えられます。

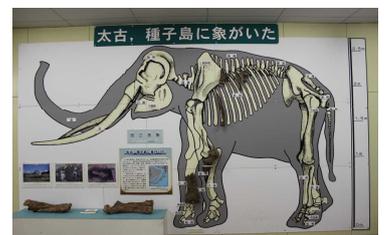
形之山では、ゾウのほかにも、魚、シカ、エビ、カニ、二枚貝、巻き貝、植物などの化石が数多く見つかっています。



ノコギリガザミの化石

種子島総合開発センター  
（鉄砲館）所蔵

種子島はまさに「化石の宝庫」です。発見された化石は、南九州や南西諸島の古地理や過去の気候、生物地理区の変遷を知る上で、大変貴重な資料となっています。



ゾウの化石レプリカ

鹿児島県立博物館別館（宝山ホールの4階）には形之山のゾウ化石のレプリカを展示しています。ここには、恐竜化石をはじめ多くの化石を展示してありますので、ぜひご覧になってください。